

---

# さあ、この広い大空に

聖なる写真

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

さあ、この広い大空に

### 【Zコード】

Z5748E

### 【作者名】

聖なる写真

### 【あらすじ】

【七夕小説企画『星に願いを』】 高校生、氷雨蓮はおバカな赤西由樹と共に不思議な巻物を見つける。それが彼らの冒険の始まりだった 蓮「ジャンルコメディーの癖に」つるせえ

(前書き)

先に言つておきます  
色々とゴメンなさい  
感想、マジでください  
満天の星空への幻想感が大好きな人は読まないでください  
これはマジ

「……だあ　　！」

「！？いきなりなんだよーー！」

僕の隣にいた少女、赤西由樹は、いきなり大声を出す  
あまりの大きさに周りの人あかにしうきが由樹を見た  
……まあ、周りの人つていっても僕と先生だけだけど

「なんで！なんで！なんで！なんで七夕にー補習がーあるのよ  
ーーー！」

「てめえの責任だろ！うが……」

先生が呆れた様に呟いた  
僕も呆れて言づ

「…君の点数があまりに低すぎるから補習を受けなくちゃいけなくなつたんだろ？…？」

付き合う僕らの身にもなつてくれよ…」

「七夕はー恋人たちのー憩いのときでしょーうがーーー！」

『『ごめん、訳がわからんねえ』』

由樹の意味不明の叫びを僕らはアッサリと切り捨るよつて突っ込んだ  
そう、彼女由樹は成績の悪さは天下一、と例えられるほど成績が低  
かった

去年は進級ギリギリで、今年は留年か、と噂されているほどだ  
でも、今年の担任の先生が熱心なほど生徒に情熱を注いでおり、今  
日の補習も先生が企画したもの

僕も成績がいい、という理由だけで今回の補習に参加された

…………最初のセリフは僕が言いたいよ

「悪いが氷雨ひさめ、俺は一度職員室に戻らなくちゃいけないから  
あ、はい……」

先生はそういうと教室の扉を出る

…………で

「……なにせつているんだよ……」  
「……家搜し?」  
「聞くなよ、そしてなんだよ家搜しつて

由樹は部屋の中を荒らしく回っていた  
その内、ポトリと古びた巻物が落ちる

「……なんだこりゃ?」  
「巻物だろ。や、戻つて補習補習  
早くやれば早く終わるからわ」  
「開けてみよウカ」  
「ダメ!」  
「えい!」  
「あ……」

由樹は巻物を紐解き一気に広げる

ソコに書かれていたのは“夏の大三角形”と呼ばれる星々…

琴座のベガ、鷲座のアルタイル、白鳥座のデネブの3つだったぶん

え？なんで“たぶん”なんだって？

それは巻物に書かれていたのは3つの黒い点だつたから  
その隣にそれぞれ“織姫”“彦星”と書かれていた

本当にそれだけだった

「…空を舞う姫君よ…」

汝が想いはもはや届かず…」

「……は？」

突然、由樹が変なことを言い出したのだ  
僕は思わず目が点になつた

そして、次の瞬間

「巻物光つてないか！？」

「え？あ！本当だ！」

巻物がひかりだし、僕らの意識は無に落ちた

……ここで、僕の自己紹介をしよう

僕の名前は氷雨蓮

本当にただ、平凡な高校生だ

意識が戻ると、そこは満天の星空の上だった

「……どこだここ？」

知らず知らずの内に声が出る  
ふと、隣を見れば由樹が幸せそうな顔で眠っていた

「おい、起きる、おい」

「ん~? ……つてここどこー? ! ?」

「星空の上、そうとしか言えないね」

「あんびりいばぶる! !」

「……」

ハイテンション、としか言い様のない慌てぶりに少々の苛立ちを覚えたが、僕は冷静になって周りを見渡す

本当に星空の上、としか例え様のない世界だった

奇妙な浮遊感に囚われたが、それよりも僕はある人物に目を奪わってしまった

「……あれって…織姫様! ?」

僕の考えを由樹が代弁する

そう、僕らの目の前の人物は美しく、知性を秘めた女性で、着てい

るものは昔の中国風の服装、

どうみても織姫だった

だが、今は嘆き悲しみ、涙を流している  
なにがあつたのだろうか

そう思案していると、とあるく（空氣） イ（読めない） 馬鹿が話しかけた

「お～い、なんで泣いてるの～？」

「つおおおい！」

とあるくマ鹿＝由樹

「…………あ、あのあなたたちは……？」

「…………氷雨蓮です」

「赤西由樹だよん」

涙で真っ赤になつた織姫の質問にあくまで冷静に答える僕に対し、  
くく、としか例え様のない明るさで答える由樹  
あまりに空気が読めてないので僕は突っ込みがわりに由樹の頭をしばく

何気ない言葉がした

「なつ……なにするの……！」

「失礼ですけど……貴女は織姫ですか？」

「は……はあ……」

由樹の怒りを無視しながら答える僕に対し驚いたように答える織姫  
まあ、昔の人の反応としてはいい方だろう

……本題にいこうかな……

「先程はどうして泣いていたんですか？」

「…今日は7月7日…」

「七夕だよね」

「…それと同時に織姫と彦星が…そつか、彦星に会えなくなつたのか」

「はい…」

「なんですか、天の川くらになら渡れるでじょう?」

「…カササギ…」

『は?』

織姫の呟きに思わず聞き返す僕ら  
カササギ?なんのことやら

「7月7日…天の川の上をカササギが橋の様に架けてくれるから…  
私たちは出会えた…

でも、今年は…」

「そのカササギが1匹もいなつてか」

だから会えなくなつたのか

カササギを見つけださなくては…でも、どうしたらいいか分から  
ない

だが、KYOUな由樹はアツサリと言つて切つた

「…よし!任せて!!私たちがなんとかしてあげる…」

「……はあ…?」

「…よろしくお願いします…!..」

僕が反対意見を言つ前に、織姫が承諾してしまつたので僕は反対できなくなつてしまつた

僕も助けたいとは思つたけど……

……どうじゅうつていうんだよ……

3

織姫と別れて歩くこと5分、僕は由樹に尋ねてみた

「……どうするんだよ……」

「うへん……」

僕の質問に由樹は、考え出した

なにも考えてなかつたんかい……

そう、突っ込みたかつたが、止めておいた

向こうから人がやつてきたからだ

その女性は水の乙女、としか例え様のない美女

そうとしか言えなかつた

「あなたたちは……？」

「氷雨蓮です」

「赤西由樹だよん」

またもハイテンションで答える由樹を一撃する  
やはり、美女は呆れ果てていた  
美女は水瓶座のアクアと名乗った  
ちなみに水瓶座は英訳するとAquariusらしい

「…で？何故あなた方はここにいるの？」  
「え？あ…実は…」

織姫のことと言つとアクアは知らない、と言つた

「そういえば確かにカササギがないなあ、とは思つてはいたんだ  
けど  
そんな事態になつていたとはねえ…」

「誰か他に知つていそうな人はいませんか？」  
「ん~…レオに聞いてみるしかないかなあ…」

アクアはそう言つと、懐から携帯電話を取りだし、慣れた手つきでボタンを押すとレオ、という人物にかけだす  
電話使えたのかよ！と突つ込む前に、アクアが携帯を切り僕に向き直る

「レオも知らないってさ」  
「あ…そうですか…」

こう答えるしかなかつた

ちなみにレオ（Leo）は獅子座の英訳、次は乙女座（Virgo）  
か、射手座（Sagittarius）か、山羊座（Capricorn）か

「ねえねえ！この人がカササギ見たつて……」

由樹が連れてきたのはどこの男性

…「マイシビ」行つてたんだ？

「あ、どうも、マーズです」

マーズ（Ma’rs）かよ、火星かよ、惑星かよ

「カササギを連れ出す怪しい人影が……」

「すまん、始めから話してくれ」

「ん…ああ、わり…」

実は、今日俺はジュピターへの告白の練習をしようつとだな……

「……すまん、手つ取り早く教えてくれ」

ジュピター（Ju-pi-tēr）……木星に告白ねえ…やつぱり惑星

は惑星に恋をするんだなあ…

とこつか、惑星どうしの子供つてなんだら…やつぱり惑星なのか

……

「……まあ、俺がいつもどうつ告白の練習をしようつと、北緯75度あたりに行つたらなあ……」

「……一つ、突つ込んでいいか……？」

「別にいいが？」

「いつもどうり告白の練習してんじゃねえーとつと告白つー…

とにかく北緯75度つてどーだー？」

「あつはつはつ、手厳しいなあ～」

ちなみに由樹は話に全くまぎれていない  
少し離れてどこの女性と話し込んでいる

「で？ 次々」

「ああ、いつもどうり北緯75度に行つたんだ

そしたら、真っ黒な影が力ササギを大量に連れ去つていたんだ  
カササギは暴れていたから、水音が凄く立つていたんだ」

「……悪いけど連れていつてくれないか？ その北緯75度に

「ああ…いいぜ」

「あのさあ…」

話し込んでいた俺たちに割り込んできたのは由樹だ  
隣にはさつき話し込んでいた女性だ

はつはあ……そういうことか

「ジユ、ジユピター！？」

「あの…さつきの話を聞いて…」

「あ、あの…答えは！？」

「ごめんなさい！！！」

「ガ  
ン！」

憐れ、また一つの恋心が散つた

「…………」

マーズが案内したのは北緯75度と呼ばれる地点  
涙目なのは、きっとさつきの失恋が尾を引いているのだろう

「気にはんなよ…失恋なんていくらでもあるだろ！」

失恋者には恐らく最も残酷なセリフを由樹が言い放つ  
思惑どおり、マーズは人生の終わりの様な顔をしている

「……で？そのカササギ泥棒はどうちに行つたんだ？」

「…………」

マーズが指差した方向は“東”だつた  
ここからは一本道なので、迷う必要はなさそつだ

「…よし…行くか！」

「OH！逝くぞ！！」

「お決まりのボケをかますな！」

僕は再び由樹の頭をしばく

わつきしばいたときよりもいい音がした

「…………？」

ついたのは変わった屋敷だつた  
うん、なにが変わつてゐるかつて

屋敷の周りに星々がキラキラと飾られている時点でもう変だら  
しかも、看板つていうのかな……扉の上に金ぴかの文字で“Ven  
us”と書かれていた

「悪趣味すぎるだろ…」

「悪趣味つてレベルじゃなによ……」

ちなみに“Venus”は惑星の一つ、金星だ  
作者よ……金星になにか恨みでもあるのか……?  
とりあえずチャイムを……

「お…押したくなえ…」  
「…み…右に回じ…」

いや、だつてチャイムウ○チだぞ?ウ○チ  
誰も触りたくねえつつの といふか、どんなセンスしてんだよ  
この屋敷の持ち主は……

七八

いきなり人が出てきたことと、出てきた人を見て僕らは悲鳴を上げる  
いや……だつて……

オッサン、……

出てきたのは、ものすごい脇臭そうな濃い髭面の、女物の服を着た、

「あ～ら 可愛いじゃない なんの用？」

「ひいつーす、すみませんでしたあ！」

バチンと音がしそうなほど激しいウインクに涙目で謝る由樹  
別に謝らなくてもいいのに……

「……いや、あの…カササギが盗まれた件についてなんですが……」  
「……何故私だとわかったの？」

……

「なに血田しづかってんの！？ある意味自爆！？これ自爆だよね！？」

「あら～ 失言？つづかりい

てへつ 「

バチンと再びまつ毛が閉じる音がする  
そんなヴィーナスの姿に涙目になる由樹

「……帰りたいよお（Ｔ○Ｔ）」「  
「顔文字使つても帰れねえよ」

正直言うと俺も帰りてえよ…（ノ 丶 T）

けど、アホみたいな雰囲気とは裏腹に、金星のオッサン（ヴィーナスといつらしい）は異様なまでに集中力を増していく  
それに続くように、ヴィーナスの身体中の筋肉は赤く染まり、湯気を立てはじめている  
ヴィーナスの服装がおかしくなければ、十分、バトル系では絵になる光景だ

「悪いけど……口は封じさせてもらいつわ」

「封じます！封じます！だから帰らせてください…」

由樹の願いも虚しく

ヴィーナスが襲いかかってきた

5

ヴィーナスが襲いかかり、戦闘は不回避となつたはず。

だつたよな

「ま…負けたわ…カハツ…」

いや、だつて、ワンパンチ一発だよ？

ヒットで撃沈だよ？

「『めんなさ』… カササギを売つて金にしよつと…

「待て、なんだその現実味に満ちた理由は金なのか、この世界も金がものをいつのか」

ヴィーナスの突然の自由に思わず突っ込む僕

「Jの星空の世界は清潔かな世界であるでござりか」た  
でも、携帯とか使つていたしゃつぱつJの世界も産業革命とかがあ  
つたのぢうか……

「いや、もう大丈夫だから

「アハハ…アハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

-〇ナ!?

由樹の行動に突っ込みまくる僕、元ネタ、分からなかつたら無視の方向で分かつても無視の方向で

「……まあ、いいか」

「二の、家の裏こ  
で?今、ガサガサはどこにしるんだ?」

ヴィーナスが指差した先にある悪趣味すぎる家  
その裏にいるという力ササギ

「……まあ行つてみるか……おい、行くぞ」

八一

やけにテンションの低くなつた由樹を連れて、僕は家の裏に急げ

「まあこれで終わりかな……せつと帰れるよ……」

僕は今までの疲れからボソツと呟いた  
だが、この考えは間違つていた

なぜなら……

「……遠すきい……」

「ウガ　……！」

復活して暴れだす由樹を抑えつつ、僕は地平線の彼方を見つめた  
そこには、まだヴィーナスの屋敷が続いていた  
最初はなんとかなるだろう、と思つていたのだが……  
かかった時間……今まで約1時間半……

「広すぎるわ　……！」

「分かつたからもちつけ、いや落ち着け

「疲れたあ　……！」

「ハイハイ分かつたから分かつたから

暴れだす由樹を再び抑えつつ、歩きだす僕ら

……あと、どのくらいかかるんだ……？

「…………だりい……」

「……は、早く、か、帰りたい、よ……」

「……み、右に同じ……」

結局、あと3時間かけてカササギのところについた……

「……帰りは憂鬱だ……」

「……だね……」

もう、歩いて戻りたくねえ……

そう思って、なにかいものはないかと周りを見渡せば……

あつたよ……

トラックが……

「……免許無くても大丈夫だよな……？」

もう、星空の世界にトラックあるのか？といつ突っ込みはなしで

「……いいんじゃない……たぶん」

カササギは眠っているし、たぶん大丈夫だろ

由樹の言葉でそう判断すると、僕らは苦労して眠っているカササギをトラックの荷台に乗せる

「さてと……長居は無用、さつさと行くか

「起きましょー」

「字が違うー」

また、同じネタを繰り返す由樹の頭をしばく僕  
さつきよりもさらにいい音がした

「天の川にこいつらを放しておしまいか……」

感慨無量の気持ちで僕は呟いた

今までのことがことだけに、最後くらいには華麗に終えたい……

そう思っていた

「最期に七夕饅頭勝つていこうよ」

「字がまた違うぞ……っていうかあんのか！？七夕饅頭！？あつた  
のか！？」

「天の川で売つてたよ

遅れているなあ

「遅れているのか…？遅れているのか…？」

由樹との会話もまだまだ弾む

いやあ、青春つていいなあ……

誰だ才オヤジ臭いって言つた奴

でも、もうすぐ終わる……

それだけは絶対だと思つていた

「甘いわあん！！」

誰かがトラックを止める

僕の予想では、多分人1人だ

「ヴィ、ヴィーナス！？」

由樹の呟きを止めた本人

ヴィーナスはどう吹く風と聞き流し…

…投げキッスを投げた

吐いた

ええ、吐きましたとも、

僕と由樹が

「美の象徴は何度でも蘇るのよー！」

「うるせえよボケ

てめえのどこが美の象徴だ

1回内臓ぶちまけて死にさらせ

自分でも、自分の声が冷酷に聞こえた

「ぶつ殺せ！－！－！－！」

由樹のテンションも今までで一番高くなっている

アクセルを踏む足に力が入る

トラックが音を立てる

ヴィーナスが踏ん張る

……不意に銃声がした

「……少し……頭冷やそうか……」

現れたのは織姫だった

こめかみがピクピクしているのは氣のせいではないはず

セリフが某冥王のセリフなのも氣のせいではないはず

「ちよっとあの世にお使いを頼みます」

「めかみをピクピクさせたまま織姫は銃を乱射する  
ヴィーナスが避ける

そこをすかさず

「 oo oo bye」

僕がトラックでヴィーナスを撥ね飛ばした  
どこかの悪役になつた気がした

「バーアバーオーン」

某アニメの悪役のヤラレゼリフをいながらヴィーナスは空の彼方  
へと吹き飛ばされていった

不思議と罪悪感はわかなかつた

本当にありがとうございました」「やあ

「本当によかったです……」

「……水を差すよりで悪いのだが……」

あれから30分、無事に天の川に辿り着きカササギが美しい橋を作つている

ヴィーナスは西経89度辺りで発見されたのだが、ピンピンしててあの悪趣味な家に帰つたそうだ

また元気なことで……としか言い様がない

もう会いたくはないが、もし次に出会つたら確実に息の根を止めてやううと誓つた

そのとき、由樹も殺害方法を必死に考えていたので、おやじく同じ気持ちだろう

それくらい必死になつて勉強してくれたらなあ……と、思ったのは秘密

「なんでしょうか？」

「俺たちどう帰ればいいんですか？」

「……ああー現世に帰るなら、そのモーターボートで……」

星空への夢を帰してください……

そう思つたが、帰れなくなつては元も子もないの、ありがたく恩恵を受けることにした

「おひし、帰るか……つてなんだそれ？」

ふと見れば、由樹は長方形の箱を抱えている  
例えば、ほら、温泉饅頭の様な……

「ほらわしき言つてたじやん…七夕饅頭」

「…………マジで有ったのかー!?

「ココで売ってたんだー!?

つてもう織姫行ってるしー別れを少しほ惜しんで!

もしかして…

そつ思つと、僕は知らず知らずの内に眩いていた

「…………織姫と彦星つて世界で一番最初のバカツプル?

「かもねえ…」

僕の疑問に曖昧に答える由樹

その日は『正直どうでもいい』と語っていた

モーター・ボートに乗り込みエンジンをかけて、いざ出発

河の流れにのつて、モーター・ボートを走らせていく内に、謎の声が聞こえてきた

『おー、起きる、おひってば』

その声は、どこかで聞いたことがある声だった  
どこかで

「氷雨、起きろ  
なに居眠りしているんだ  
コラ  
「…………ハイ?」

気がつけばそこは、いつもの教室  
先生が僕らを揺さぶっていた

隣では由樹が爆睡していた

• • • • •

えせむるひ

あまりに腹が立つたので頭を10発近くしきまわす  
とてもいい音がした

「もう、今日は遅いから帰つてもいいぞ」「ありがとうございます」「現金だなあ……」

頭にタンゴブを作りながら、お気楽に答える由樹と、その態度に呆れ返る僕

もう、時刻は8時を回っていた

外に出ると、出迎えてくれたのは満天の星空  
あまりの星の多さ、美しさに“夏の大三角形”を探し出すのは不可  
能に思えた

「キレイイ  
「凄いな  
」

駅までの間、満天の星空を見つめながら歩く僕、  
だが、僕は一つ気になることがあった

あれは“夢”だったのだろうか……

星空に答えを尋ねても、帰つてくることはなかつた  
だが、それはそれでいいのかもしれない……

空は常になにも問わず、言わず、その姿を変えていく  
それが、空の真の美しさだと、僕は思つてゐる

「夏の大三角形ビィイィイィイィムーー!」

「霧囲氣壊すな!!」

KYすぎる由樹のセリフと行動に、僕は由樹の頭を全力でしばく

今までで1番いい音がした

さて、明日も頑張るか

(後書き)

あ

感想など、いただけたら嬉しいです  
オリジナル小説『神様と私』の方も見て、感想をください

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5748e/>

---

さあ、この広い大空に

2010年10月20日19時57分発行